

ハとガの試論（1）

－総記と中立叙述－

A Hypothesis about Wa and Ga (1)

－ Exhaustive Listing and Neutral Description －

谷 守 正 寛 *

TANIMORI, Masahiro

キーワード：ハ，ガ，総記，中立叙述

Key Words: Wa, Ga, Exhaustive listing, Neutral description,

1 はじめに

ハとガに関する論考は数多い。稿者は、ハとガについての論考をすすめるうえで、試論として提出していくもくろみであるが、まず、本稿は、ハとガに関する久野(1973)の論考に遡って、特に焦点を絞り、吟味・検討を加え、ハとガの枠組みについて再考を少しく試みるものである。

久野(1973)によれば、ハには、主題を表わす「ハ」と対照を表わす「ハ」の2つが、ガには、総記を表わす「ガ」と中立叙述を表わす「ガ」と目的格を表わす「ガ」の3つの異なった用法があるとされる。これらは、現在でもなお、一定の認知を得た用法として説明されるが、このような分類では、ハとガの違いを探ることはむずかしい。本稿では、この用法の分類について吟味し、ハとガをめぐる新しいパラダイムの編成・構築の可能性を模索する。このことによって、ハとガの性質を説明するより普遍的なルールを探求するきっかけとしたい。

2 ハとガの用法（久野(1973)）

久野(1973)では、ハとガの用法が次のように分けられている。

(1) a. 主題を表わす「ハ」:

太郎ハ学生デス。

b. 対照を表わす「ハ」:

雨ハ降ッテイマスガ、雪ハ降ッテイマセン。

(2) a. 総記を表わす「ガ」:

太郎ガ学生デス。

(「(今話題になっている人物の中では) 太郎だけが学生です」の意味)

b. 中立叙述を表わす「ガ」:

雨ガ降ッテイマス。

* 人間文化課程国際言語文化講座

c. 目的格を表わす「ガ」:

僕ハ花子ガ好きダ。

久野(1973)によれば、中立叙述のガは、述部が動作を表すか、存在を表すか、一時的な状態を表すかの場合に限られ、述部が恒常的状态、習慣的動作を表す場合には、ガは総記の解釈しか受け得ないと、次のような例をあげて説明している。

- (3) a. 太郎ガ見舞イニ来テクレタ。
 b. 手紙ガ来タ。
 c. 雨ガ降ッテイル。
 d. 机ノ上ニ本ガアル。
 e. オヤ、アソコニ太郎ガイル。
- (4) a. 空ガ青イネ。
 b. 大変ダ、太郎ガ病気ダ。
- (5) a. 太郎ガ学生デス。
 b. 猿ガ人間ノ先祖デス。
 c. 太郎ガ日本語ヲ知ッテイル。
 d. 太郎ガ日本語ガデキル。
 e. 僕ガオスシガ食ベタイ。

説明では、(3)は動作、存在を表す場合で、(4)は一時的な状態を表す場合であり、極めて自然な座りの良い、特殊な文脈を必要としない文とある。(5)は極めて座りが悪く、「今問題にしている事物の中で学生なのは、太郎です」あるいは、「今問題にしている事物の中で太郎だけが学生です」等々の意味であり、「太郎だけが」の解釈を自然にするような文脈が必要である。

最近においても、例えば、庵・他(2001)では、久野(1973)に倣って、ガの用法として中立叙述と総記の二つの用法をあげている。次がその例の一部である。

- (6) 見て。窓から富士山が見えるよ。
 (7) (登山で山頂に着いたとき)あー、空気がうまい。
 (8) (交番で巡査に)道にこんなものが落ちていました。
 (9) A: 誰がこのコップを割ったんですか。
 B: 田中さんが割ったんです。
 (10) こちらが田中さんです。

(6)-(8)は中立叙述、(9)と(10)は総記の用法である。さらに、ガが中立叙述になる文を現象文とし、主語も述部も新情報の場合であると指摘している。総記は、述部が旧情報の場合である点で異なると説明している。このように分けられることは、ガの用法として二分される「中立叙述」と「総記」を認知する考え方が、ガをめぐる考えの一部かもしれないとしても、少なくとも今なお継承されていることを意味するだろう。なお、目的格を表すガについてはここでは扱わない。

例えば、大野(1978)も、文は二つの要素の組合せによって成り立ち、そのうち、現象文のタイプについては、未知(扱い)と未知(扱い)の型として、文全体が一瞬にして認識されたものだ、としている。ただし、これについての検討は別の機会に譲りたい。

さらに、久野(1973)によれば、次の例をもとに、述部が動作・存在・一時的状態を表す場合、ガは総記と中立叙述の二義をとり得ることを示している。

- (11) a. 太郎ガ死ンダ。[中立叙述]

- b. 誰ガ死ンダカ。太郎ガ死ンダ。[総記]
- (12) a. 空ガ青イ。[中立叙述]
b. 何ガ青イカ。空ガ青イ。[総記]
- (13) a.*猿ガ人間ノ先祖デス。[中立叙述]
b. 何ガ人間ノ先祖デスカ。猿ガ人間ノ先祖デス。[総記]
- (14) a.*東京ガ大キイ。[中立叙述]
b. 世界デドノ都市ガ一番大キイか。東京ガ一番大キイ。[総記]
- (13a)(14a)では、述部が恒常的状态を表すために、「猿ガ」、「東京ガ」は中立叙述の解釈を受け得ないとしている。ガの用法をまとめると、[表1]のようになる。

[表1]

述部の表す意味	ガの意味
動作	中立叙述 総記
存在	
一時的状態	
恒常的状态	総記
習慣的動作	

以上のような、ガの枠組みを中心に、ハとも関連づけながら、あえて、当初持ち出されたこの考え方に焦点を置いて、考察したい。

3 考察

3.1 総記について

まず本稿で問題とするのは、総記をめぐるものである。

(15) 太郎ガ学生デス。 (= (5a))

久野(1973)では、(15)について、「今問題にしている事物の中で学生なのは、太郎です」あるいは、「今問題にしている事物の中で太郎だけが学生です」の意味であり、このような「太郎だけが」の解釈を自然にするような文脈が必要である、とした。その場合の文脈の例が次の文である。

(16) 誰ガ学生デスカ。

すなわち、(16)の質問に対して、聞き手は、自分の知る限り、該当者・該当物を全て列挙しなければならないのであり、太郎、花子、二郎、三郎が話題の中心で、そのうち太郎と花子が学生だとした場合、(16)に対して聞き手が(15)で答えたとすれば、嘘をついたことになり、「太郎ト花子が学生デス」と答えなければならない、としている。

さてここで、話し手が嘘をついたことになるのかどうか、という基本的な前提について考える。このことを吟味するために、英語を例にとって検討する。次例を見られたい。

(17) A: Who is a student ?

B : Taro is a student and Hanako is a student, too.

話題となっている人物達の中で、誰が学生かを問うているが、英語では、不特定の学生、つまり、「学生」という身分を持つ不定の人物として尋ねることができ、言語形式上もそれが<a student>となって表れる。日本語では冠詞がないためにそうした弁別ができず、次の意味にとられやすい。

(18) A : Who is the student / are the students ? (誰が(その)学生ですか。)

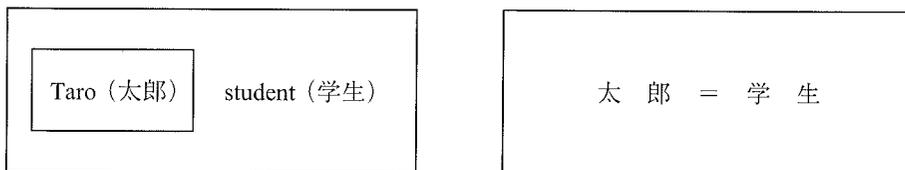
B : Taro is the student. (太郎が(その)学生です。)

(18)においては、学生は話題になっている特定のタイプの学生をさし、その学生が太郎であると指定している。つまり、(18)の日本語文は、次の文とほぼ同じ意味を表す。

(19) A : (その)学生は誰ですか。

B : (その)学生は太郎です。

Bの言う文は、三上(1953)の提案した「指定文」であり、学生を太郎だと指定している。したがって、太郎以外の人物は学生でないことを示唆する（それでも実際は、太郎以外の者も学生である可能性は残ってよいと思われるが）。(17)の“Taro is a student”（太郎が学生です）と、(18)の「太郎が学生です」および(19)の「学生は太郎です」には、それぞれ、以下のような違いが認められよう。



該当する主語がガによって強調されることによって、太郎以外の者は学生ではないと解釈されやすいのであって、ガの素性の中に、ガで表示される主語以外は述部の表す内容に該当しないという排他的な意味までも含み持っているとは考えがたい。むしろ、発話の状況・文脈などから特定の学生なのか、不定の学生なのかが決まると考える。問題は、はたして(17)の話者Bは、第一文を発した時点で、嘘をついているのか、話者は自分の知る限り、該当者を全て列挙したうえでなければ答えてはいけないのかどうかである。次は(17)の日本語訳である。

(20) A : 誰が学生ですか。

B : 太郎が学生です。それから花子も学生です。

(20)で、話者Bが「太郎が学生です」と表現した時点において、ガで主語をマークしたにもかかわらず、話者Bは嘘をついたことにはなるまい。なぜならば、花子も学生だと次に述べているからである。話者は誰が学生かを聞かれて、まず思いついた人物「太郎」をガ格で表示し、その瞬間に嘘をつく意図はない。ガ格主語以外の人物が学生ではないという排他的示唆を含むとは決めつけがたい。

(21) A : Is there anyone coming to dinner ?

B : Yes, there's Harry and there's also Mrs.Jones. (QUIRK and GREENBAUM(1973))

(21)について、英語では存在する特定の主語であっても、列挙する場合には There be...が使われるという説明があるが、これを日本語に訳すと次のようになる。

(22) A : デイナーに来る人がいますか？

B : はい、ハリーがいます、それからジョンズ婦人がいます。

これは(17)に類似した質問と応答である。次のように書き換えてもよい。

(23) A : 誰がディナーに来ますか？

B：はい、ハリーが来ます，それからジョンズ婦人が来ます。

実は，この場合は，述語が存在(=(22))あるいは動作(=(23))を表すので，久野(1973)に従えば，中立叙述の解釈が可能であり，第一文を述べた時点で総記の意味にはならなくともよい。その場合は，ハリー以外の者は来ないという意味にはならない。しかし，ここで，ディナーに来る客を「常連」と書き換えてみよう。

(24) A：誰がディナーの常連ですか？

B：はい，ハリーが常連です，それからジョンズ婦人が常連です。

つまり，「常連」は「学生」に似て，恒常の状態を表し，従って，久野(1973)に従えば，このガは総記の意味にならなければならないことになる。これを(15)と(16)の対応関係に準じて考えれば，聞き手Bは，自分の知る限り，該当者を全て列挙しなければならないが，ガは総記を表さなければならない。第一文で，ディナーの常連はハリーだけだということになれば，その時点でBは嘘をついていることになる。なぜならばジョンズ婦人も常連だからである。

「総記」に当たる「排他」(三上(1963))という語を使って，野田(1996)では，「強い排他を表すガ」と「弱い排他を表すガ」というものに分けて説明している。「弱い排他」を設定し，(24)のガは，ハリー以外にも常連である者がいることを必ずしも排他しないという捉え方をしてもよい。しかし，野田(1996)のいう「弱い排他を表すガ」とされるものは，(24)のBについて言えば，依然，「ハリーだけが常連だ」ということを暗示するという解釈であった。その点で，本稿の考えとは依然異なる部分がある。また，野田(1996)では，周辺的なものとして，「排他を表すともいえないが，単に主格を表すともいえないような「が」が使われている文」を挙げているが，ここで扱う文とはタイプが異なるため，ここでは特にふれないこととする。

このように吟味してみて分かることは，述語が恒常の状態を表す場合の主語マーカーであるガが総記を表すかどうかは，ガ自体に備わる性質ではなく，外部的な要因や発話の状況などにより決定される可能性がある，ということである。次例を見られたい。

(25) A：誰が社長ですか？

B：はい，太郎が社長です。

(26) A：誰が主役ですか？

B：はい，太郎が主役です。

この場合，通常，社長や主役は一人であるという常識(外部的要因)が働き，他の者ではなく太郎だけが社長あるいは主役であるという意味になる。つまり，そうした文脈，条件，環境などによって，総記の意味が生じたのであり，ガの性質だけによって生じたと決めつけることはむずかしいと考える。

3.2 中立叙述について

久野(1973)によれば，主語をガでマークした文の述語が，動作，存在を表す場合，および一時的な状態を表す場合，極めて自然な座りの良い，特殊な文脈を必要としない文となる。これが「中立叙述」である。[表2]において，(3)(4)のガをハに書き換えた文と比較されたい。

本稿で主張したいことは，[表2]の主語をガでマークした左欄の文は，「特殊な文脈を必要としない」ということではない，ということである。言語形式として表れる文脈はたしかに見あたらないが，中立叙述文は，必ず，ある文脈に似た流れを伴う。それは，述べる内容に含まれる指示対象あるいは聞き手が参加する「発話の場」である。この「発話の場」は，文脈と同じく，文を述べるための経過・経緯を，発話する舞台として提供している，と考える。

庵・他(2001)では、ガが中立叙述になる文は、現象文、あるいは出来事を報告する文（報道文など）であるとした。例えば、[表2]の「太郎ガ見舞イニ来テクレタ」という文ならば、太郎が見舞いに来たのをそのまま述べた現象文であるか、あるいは、太郎が見舞いに来たことを報告する報告文である。前者の場合は、太郎が見舞に来たところを目撃しているという一種の「文脈」が必須である。後者の場合は、報告するというのは、報告を発話するに至る状況が、必ず存在しなければならない。そうした状況（一種の文脈）が存在せずに、報告するということは考えられない。例えば、病人が、太郎を知る人物を聞き手とし、場合によっては、太郎が見舞いに来た兆候が目の前に存在し、それをきっかけとして述べているといった流れである。これに対して、「太郎ハ見舞イニ来テクレタ」にはそれは必要ない。ただ、太郎について説明しているだけであり、特殊な文脈を必要としない。

[表2]

中立叙述の文	主題の文
太郎 <u>ガ</u> 見舞イニ来テクレタ。 手紙 <u>ガ</u> 来タ。 雨 <u>ガ</u> 降ッテイル。 机ノ上ニ本 <u>ガ</u> アル。 オヤ、アソコニ太郎 <u>ガ</u> イル。 空 <u>ガ</u> 青イネ。 大変 <u>ダ</u> 、太郎 <u>ガ</u> 病気 <u>ダ</u> 。	太郎 <u>ハ</u> 見舞イニ来テクレタ。 手紙 <u>ハ</u> 来タ。 昨日カラノ雨 <u>ハ</u> マダ降ッテイル。 本 <u>ハ</u> 机ノ上ニアル。 太郎 <u>ハ</u> アソコニイル。 空 <u>ハ</u> 青イ。 太郎 <u>ハ</u> 病気 <u>ダ</u> 。

「机ノ上ニ本ガアル」は、本の存在を目撃しているという発話に至る文脈・経緯が必要である。「本ハ机ノ上ニアル」はそうではなく、「中立的な」説明でありうる。

「空ガ青イネ」は、話者（と聞き手）は空を見ているか、見られる状況にあることが必須である。そのことが発話を促す文脈として機能している。一方、「空ハ青イ」は、ただ、空というものについて説明を加えているにすぎず、何の特殊な文脈（状況）もなしに述べられる文である。

「大変ダ、太郎ガ病気ダ」は、大変であるということが窺われる状況が必須である。おそらく話者が大変だと慌てている状況が、この文を発話する文脈として機能する。一方、「*大変ダ、太郎ハ病気ダ」は非文となる。「太郎ハ病気ダ」は特殊な文脈を要せずに述べることができる。

大野(1978)では、「花が咲いている」とは、現実の花を発見して、あるいは驚き、あるいは喜び、それを目前の事実として描写したものである、と説明している。しかし、この文の話者には、発話以前に、「現実の花を発見して、あるいは驚き、あるいは喜ぶ」という経緯（非言語的文脈）が必要なのであった。この経緯が、実は言語化されるものではないために、文脈を必要としない、と思われがちなのであろう。「現実の花を発見」するという非言語的だが一種の文脈があるからこそ、「花が咲いている」と述べるのであり得るのである。何の前提（文脈）もなしに、つまり、中立的にこの文を述べることは、実際、あり得ない。

このようなことから考えると、ハによる主題の文こそが、特殊な文脈を必要としない中立的な文であり、主語をガでマークした「中立叙述文」とされたものが、実は、言語形式上ではなくとも、特殊な文脈（発話の場、発話に至る経緯）を、先行する文脈のごとく、前提として必要としている。

こうした点から、本稿では、ガが主語をマークする文は、何ら特殊な文脈を伴わずに、「極めて自然な座りの良い」文を成立させるとは考えない。従来の分け方では、ハが「主題を表す」ということと、ガが中立叙述を表すということとの違いを、同じ次元で比較する方法がなかったのである。なぜならば、ガはそもそも、主題を表さないからである。

4 まとめ

本稿では、久野(1973)の説明する「中立叙述」と「総記」について、少しく吟味し、再検討を加えた。ガの用法としての「中立叙述」は、実は、「特殊な文脈を必要としない」ということではないということをも提案した。そもそも、ハが主題を表すとしながらも、中立的な叙述ではないという説明があったわけではない。そこで、むしろ、主題を表すハが主語をマークする文が中立的な叙述であると主張した。また、「総記」のガについては、総記の意味を伴うのが、ガの性質だけによってではなく、先行する外部的要因や発話の状況などにより決定されるとした。その点で、「中立叙述」と「総記」に共通する性質が窺えることになる。従って、あえて中立叙述と総記とに区分することについては、再考の余地を残すこととしたい。両者の統一的な扱いについては、さらに今後の課題として残す。

参考文献

- Randolph QUIRK, Sidney GREENBAUM. *A University Grammar of English*. 1973. Longman Group Limited.
- 庵功 雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 大野 晋(1978)『日本語の文法を考える』岩波書店.
- 久野 暉(1973)『日本文法研究』. 大修館書店.
- 野田尚史(1996)『新日本語文法選書1「は」と「が」』. くろしお出版.
- 三上 章(1953)『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院(復刊 くろしお出版. 1972)
- 三上 章(1963)『日本語の論理』くろしお出版.

